

韓国人日本語学習者による 授受表現の習得

—授受補助動詞「テモラウ」に焦点を当てて

安蕙蓮

◆要旨

日本語は授受補助動詞を用いた授受者視点の文を表す際、「テクレル」形式と「テモラウ」形式の両方を持つ。それに対し、韓国語は「テモラウ」に相当する形式が存在しないため、韓国人日本語学習者の習得が困難であると考えられていたが、現代韓国語の中の一部語彙において「テモラウ」に相当する概念が生じつつあり、「hata (하다) 動詞語幹 + patta (받다)」の形で使用されている。本研究ではこれに注目し、韓国人日本語学習者の「テモラウ」形式の習得に関する調査を行った。その結果、日本語の「テモラウ」に相当する概念を持つと思われる語群に対し、母語の正の転移が起こっていることが分かった。これを用いて、韓国人日本語学習者における授受表現教授において新しい提案をする。

◆キーワード

授受表現、テモラウ、第2言語習得、日本語教育、日韓対照言語学

◆ABSTRACT

The aim of this study is to examine Korean Japanese language learners' acquisition of expressions of giving and receiving in Japanese. In previous research, Japanese auxiliary verb “-(*si*) *te morau*” has a benefactive meaning, but Korean have not yet benefactive expressions.

For the analysis, I focus on the argument that Ryu (1998) points out form of “Sino-Korean verbal noun stem + *patta*” corresponds to “-(*si*) *te morau*” in Japanese. The argument seems to make Korean learners' acquisition of “-(*si*) *te morau*” easier. The result indicates “Sino-Korean verbal noun stem + *patta*” corresponds to “-(*si*) *te morau*” in Japanese are easier to learn the expression “-(*si*) *temorau*”. Based on the results, I suggest the original teaching method of expression “-(*si*) *temorau*”.

◆KEY WORDS

Expressions of giving and receiving, Benefactive auxiliary verb “-(*si*) *temorau*”, Second language acquisition, Japanese language teaching, Contrastive Linguistics of Japanese-Korean

Korean Learners' Acquisition of Expressions of Giving and Receiving in Japanese

With special reference to the benefactive auxiliary verb “-(*si*) *temorau*”

HYERYEON AN

1 はじめに

授受補助動詞において、日本語は授与者視点の形式である「テアゲル」と授受者視点の形式である「テクレル・テモラウ」をそれぞれ持つ。一方、韓国語は授与者視点と授受者視点を両方表すことができる「a/e/hay cwuta」形式を持つ。授受者視点の形式のみを比べると、日本語には、相手側を主語にする形式である「テクレル」と、話者自身を主語におく形式である「テモラウ」が両方存在する。それに対し、韓国語は、相手が主語になる「テクレル」用法に相当する「a/e/hay cwuta」は存在するが、「テモラウ」に相当する表現がないという主張が多かった(林 1980, 山田 2011 等)。習得研究の上でも、韓国人日本語学習者にとって「テモラウ」系の授受表現は有標であり、習得が難しいという研究が多い(尹 2006, 稲熊 2004)。

しかし、日本語の「テモラウ」に相当する形式として「(a/e/hay)patta」が存在するという主張も少なからず存在する(黄 1994, Ryu 1998)。本稿では、この内、韓国語の中の「hata 動詞語幹 + patta (「スル動詞」語幹相当、動名詞等)」形式が日本語の「テモラウ」形式に相当するという Ryu (1998) の考えに基づき、中上級レベルの韓国人日本語学習者に対して「テモラウ」形式に相当する形式の有無が日本語の「テモラウ」形式の習得に影響を及ぼすという仮説を立て、調査を行った。

その結果、中級・上級の韓国人日本語学習者において、日本語の「テモラウ」に相当する概念が存在すると思われる語群は、母語からの正の転移が起こっていることが分かった。この調査結果を用いた教授方法として韓国語に「hata 動詞語幹 + patta」形式が存在する語彙を中心に学習を進める方法を取り入れることで、「テモラウ」形式の習得を促すことができると考えられる。

2 調査

本調査では、韓国人日本語学習者は上級レベルになっても「テモラウ」形式の習得が難しいとする授受表現習得についての先行研究を見直すため、(1) 授

受表現の学習が終わった中級レベルの学習者と上級レベルの学習者を対象に、「テモラウ」文と「テクレル」文に対する自然度調査を行った。

次に、韓国語にも一部語彙において「テモラウ」形式に相当する表現が存在するという仮定を基に、(2)「hata 動詞語幹 + patta」形式を日本語の「テモラウ」文に翻訳し、その自然度調査を行った。その後、「hata 動詞語幹 + patta」形式が存在しないと思われる語彙群に対する自然度判断結果と比較を行った。

2.1 調査語の選出

本研究では、日本語の「テモラウ」に相当する表現が韓国語に存在すると主張した黄(1994)と Ryu(1998)の先行研究を基に調査を行っている。黄(1994)は、「hata 動詞語幹 + hay + patta」形式が可能な hata 動詞が 164 語存在すると主張しているが、中には許容度が低い語彙も多く含まれていた。Ryu (1998) では、黄(1994)の語彙リストの問題点を指摘しながら、「hata 動詞語幹 + patta」形式が日本語の「テモラウ」の意味に近い形式であると主張している。Ryu (1998) は、mayil 新聞の 1 か月間の新聞記事を調査し、「hata 動詞語幹 + patta」の形の単語を 177 語見つけ出した。本調査では、黄(1994)が自然度を調べた 164 語の「hata 動詞語幹 + hay + patta」の形を取る動詞を「hata 動詞語幹 + patta」の形に替え、コーパス調査^[註1]とアンケート調査を行い、自然度が高い上位 20 語を選んだ。その後、①物のやり取りが含まれる動詞(発給、配送など)、②発話者が受益を得る当然の権利がある場合の動詞(払戻し、引継など)、③相手の好意により受益を得るような動詞(配慮、理解など)、という 3 つのグループに属する語彙が含まれるように上位 20 語の内 12 語を選んだ。また、反対に韓国語に存在しない「テモラウ」形式を持つ日本語単語 12 語を対照群として選出し、計 24 語の「テモラウ」文と「テクレル」文の自然度をスケールで答えてもらうように設定した。選出した 24 語は、以下の表 1 の通りである。

表 1 調査語 (hata 動詞の語幹のみ記述)

韓国語 有	再発給、払戻、配送、再検討、紹介、理解、割引、確認、提供、招待、寄付、配慮
韓国語 無	考慮、出演、変更、手配、料理、用意、掃除、解説、解決、努力、共感、我慢

韓国語に存在すると考えられる語は、①②③のグループに分けてそれぞれ語の選出を行っているが、①は「受ける・モラウ」の本動詞の意味が最も表れている語群、②は発話者の意志が多く含まれ、動作主の意志や感情が薄い語群（「受ける・モラウ」の本動詞の意味が①よりは薄れたが、残っている語群）、③は動作主の配慮が最も多く含まれ、発話者の感謝の意が高い語群として設定した。これは、日本語の「テモラウ」の意味に最も近い語群③、授受本動詞の意味が強い語群①、その間の概念を持つと考えられる語群②と考えられ、「テモラウ」の教授において重要なキーポイントとなると考えた。

2.2 被験者

本調査の調査対象者は韓国人日本語学習者36人と、対照群となる日本語母語話者18人の計54人である。被験者は全員大学の学部生であり（KL・KHは韓国国内の大学、NSは日本国内の大学）、韓国人日本語学習者の場合、日本滞在期間が1年未満の条件を満たす者のみを対象にした。以上の3つのグループの被験者を、次のように簡略化して表す。

- ・KL（韓国人日本語学習者、日本語能力試験1級非取得者、中級）：18名
- ・KH（韓国人日本語学習者、日本語能力試験1級取得者、上級）：18名
- ・NS（日本語母語話者）：18名

2.3 調査項目と調査方法

本研究では、先行研究で指摘されている韓国人日本語学習者の「テクレル」形式の多用と「テモラウ」形式の習得の困難状況を同時に調べるために、1つの語彙に対して「テクレル」と「テモラウ」の両方の文を作成し、スケールを使って各文の自然度を1から6の中で選ばせた。

また、韓国語にも一部の語彙において「テモラウ」形式に相当する表現が存在するとの仮定から、「hata 動詞語幹 + patta」形式を持つ韓国語を日本語訳し、実験語として扱うことによって、韓国人日本語学習者の「テモラウ」習得において母語からの正の転移があるのかを調べた。

調査内容は「テモラウ」文と「テクレル」文の自然度判断調査であり、「テアゲル」文と「ラウケル」文もダミーとして加えた。タスクの問題数は、調査用単語24語を使用した24問である。タスクは、図1のように作成した。

被験者には4つの文全てについての自然度を判断してもらった。文の隣りに1から6までの選択肢を置き、そのうち1つだけを選ぶよう指示をした。1から6までの6段階の自然度については、タスク実施法を説明する段階で「1=完全に不自然、2=かなり不自然、3=少し不自然、4=少し自然、5=かなり自然、6=完全に自然」と示した。

3. 山田さんはインドへ行くためのビザの期限が切れていることが分かった。
そこで

	不自然 ←—————→ 自然					
① インド大使館に行って、ビザの再発給を受けた。	1	2	3	4	5	6
② インド大使館に行ったら、ビザを再発給してくれた。	1	2	3	4	5	6
③ インド大使館に行って、ビザを再発給してもらった。	1	2	3	4	5	6
④ インド大使館に行って、ビザを再発給してあげた。	1	2	3	4	5	6

期限が切れる—기한이 다 되다 再発給—재발급

図1 調査に用いたタスクの実例

3 調査結果と教授法の提案

3.1 調査結果

以上の自然度判断を行った数値をもって、分散分析を行った。

表2 補助動詞の種類に対するグループ別平均得点

	KL		KH		NS	
	M	SD	M	SD	M	SD
テモラウ	4.282	0.521	5.151	0.509	5.687	0.213
テクレル	4.495	0.775	4.818	0.63	5.563	0.457

まず、「テモラウ」と「テクレル」の二つの授受補助動詞を各被験者グループがそれぞれ同じ様相で選んでいるかを検証した結果、有意ではないが ($F(2, 53) = 2.948, p = .061$)、有意傾向を見せていた ($p \leq .09$)。この結果から、韓国人日本語学習者は、中級レベルまでは「テモラウ」文より「テクレル」文を自然だと思う傾向があり、「テモラウ」文に対する自然度については、中級レベルから上級レベルに習熟度が上がるにつれて日本語母語話者に近い使用感覚を持つことが分かった。これは、上級レベルになるにつれて「テモラウ」の習得が進むことの反映だと言えるであろう。

次に、現代韓国語の中に「hata動詞語幹+patta」形式として存在し、日本語の「テモラウ」の意味を持つhata動詞12語と、日本語にだけ「テモラウ」形式が存在し、韓国語には「hata動詞語幹+patta」形式が存在しない動詞12語に対する自然度判断結果からは、1%水準の有意な差が出た ($F(1, 53) = 24.495, p < .01$)。この結果から、「テモラウ」に相当する「hata動詞語幹+patta」形式が存在する語については、韓国人日本語学習者に母語の正の転移が起こっていることが分かる。このような傾向は、中級レベルと上級レベルの学習者両方において見られた。

表3 授受補助動詞文の韓国語有無の影響によるグループ別平均得点

	テモラウ				テクレル			
	有		無		有		無	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
KL	4.443	0.488	4.121	0.769	4.569	0.578	4.421	0.590
KH	5.251	0.478	5.051	0.670	4.857	0.506	4.778	0.570
NS	5.783	0.285	5.591	0.426	5.616	0.503	5.509	0.164

3.2 教授法への提案

従来の日本語教育の中での授受表現の教授は、授受本動詞の「アゲル・クレル・モラウ」を教えた後、「食べる」や「見る」などの単純な意味の基本動詞を用いて説明を行うことが多かったが、本研究の結果を基に以下のような教授

方法を提案したい。

まず、(I) 物体を利用して、授受本動詞の「アゲル・クレル・モラウ」を練習した後、(II) 韓国語に「hata動詞語幹+patta」形式が存在する語彙を中心に学習を進める。次に、(III) 日本語にだけ存在する「テモラウ」形式を持つ動詞を教授するという順序で行うことにより、日本語の「テモラウ」形式への理解が進むと思われる。

さらに、(II) のステージでは、①物のやり取りが含まれる動詞（発給、配送など）、②発話者が受益を得る当然の権利がある場合の動詞（払戻し、引継など）、③相手の好意により受益を得るような動詞（配慮、理解など）、の3つのグループに分け、①→②→③の順序で教えていく方法が望ましい^[註2]。このような手順で日本語の授受表現を教授することによって、「テモラウ」形式を含む授受表現を韓国人日本語学習者に向けて効果的に教えることができると考える。

4 結論

調査の結果から、韓国人日本語学習者は中級レベルまでは「テモラウ」より「テクレル」の習得が進むが、「テモラウ」形式については、上級レベルに至れば、日本語母語話者に近い感覚が身に付くことが分かった。

また、「テモラウ」に相当する「hata動詞語幹+patta」形式が存在する語については、韓国人日本語学習者に母語の正の転移が起こり、「テモラウ」形式に対する理解が容易であることが分かった。

本稿では、上記の結果を基に、授受表現の教授方法について提案を行った。

- 1) 物体を利用して、授受本動詞の「アゲル・クレル・モラウ」を練習する
- 2) 韓国語に「hata動詞語幹+patta」形式が存在する語彙を中心に学習する
- 3) 日本語にだけ存在する「テモラウ」形式を持つ動詞を学習する

韓国人日本語学習者が日本語の授受表現を学習する際、以上のような順序で学習することによって、日本語の「テモラウ」についての理解が深まると考える。
〈松山大学・名古屋大学大学院生〉

注

[注1] …… 調査語の選別には新聞コーパス「Naver News library」を使用した。「gyeonghyang sinmun : 1946年10月6日創刊」、「mae-ilgyeongje : 1966年3月24日創刊」、「dong-a ilbo : 1920年4月1日創刊」の四つの新聞の創刊から1999年度までの記事が全て検索できるコーパスである。

[注2] …… 査読者の先生より、①・②・③の語群に拠って自然度解釈の差が出たのかについてご質問を頂いた。今回の調査では、それぞれの語群についての分析を行っていない。これに関しては、①②③の語群の意味分析も含め、今後の課題にしたいと思う。

参考文献

- 林八龍 (1980) 「日本語・韓国語の授受表現の対照研究」『日本語教育』40, pp.113-120.
- 尹喜貞 (2006) 「授受補助動詞の習得に日本語能力、及び学習環境が与える影響—韓国入学者を対象に—」『日本語教育』130, pp.120-129.
- 稲熊美穂 (2004) 「韓国人日本語学習者の授受表現の習得について—「もらう」系と「くれる」系を中心に—」『国際開発研究フォーラム』26, pp.13-26.
- 金澤裕之 (2008) 『留学生の日本語は、未来の日本語』ひつじ書房
- 山田敏弘 (2004) 『日本語のベネファクティブ—「てやる」「てくれる」「てもらう」の文法』明治書院
- 山田敏弘 (2011) 「類型論的に見た日本語の「やりもらい」表現」『日本語学』30(11), pp.4-15.
- 黄順花 (1994) 「日本語の補助動詞「～してもらう」に関する韓国語との対照研究 (1)」『日本學報』33(1), pp.365-384.
- Ryu, Bomyeong (1998) 「授受表現의 韓日対照研究」『日本學報』6, pp.77-106.
- Woo, Inhye (1993) 「‘하다’ 따위 용언의 피동 문제에 대하여」『새국어교육』48(1), pp.165-190.